

は　じ　め　に

当教育センターが毎年実施している学校カウンセラー養成定期研修は、14年の歳月を重ねるに至った。292名の受講修了者が、県内の各学校での教育相談活動はもとより、関心の高まりとともに県内各地に組織されている教育相談研修グループの中核的な存在として活躍されていることは、誠に喜ばしいことである。

この実践研究集録第15集は、昨年度の修了者が20日間の研修成果をもとにして、小学校、中学校、高等学校、特殊学校、施設内分校の各職場において、児童生徒との人間的な触れ合いを重視して、指導された実践記録である。

学校カウンセラー養成定期研修は、“いま、この場で”の気持ちを大切に話し合うグループ体験に始まり、相手の話を聴き、聴いたことを伝えるカウンセリング実習、カウンセリングの場面研修、ロールプレイング、グループワーク等、実技研修が中心である。話を通して相手の内面にあるものをありのままに聴きとるためには、態度や表情、言葉のはしはしまで見逃せないから、一瞬たりとも気を抜くことができない。どのように聴いたかを相手に伝え、「私の気持ちをそのまま聴き容れてもらった。私を理解してくれている」と感じさせることは、更に難しい。聴き、伝えることは、カウンセリングの重要な課題であり、研修期間中、絶えず追究される。

教育相談は、人間性を無条件に尊重することから始まり、究極的には児童生徒の人的成長を促進させようとするものである。反社会的、非社会的な深刻な問題だけが対象となるものではない。外からはどんなに些細に見えても、大部分の健全な児童生徒一人ひとりがもつ切実な悩みや問題が対象となり、それらに対処していくのに有効な相談援助過程である、と私は理解している。

研修が終期に近づくと、「子どもをみる見方が変わった」と述懐し、これまで、ともすると外側から児童生徒を理解し、評価してきたことを反省する受講者が多い。このことは、児童生徒理解に対する受講者自身の変容を示すものであり、各学校における教育相談時の技法に止まらず、日常の対話や授業場面においても、また児童生徒への一声の呼びかけの中にも、研修の成果が生かされていることを、この集録からうかがい知ることができる。

昭和46年の中教審答申は、学校教育自体の改善の方向として、「人間形成の特定の能力の伸張だけを評価することなく、その多面的、総合的な発達をいっそう重視すること」「学校における教育のさまざまな態様に即応し、たとえば社会性の発達を助長する集団活動や個人に対する適切な指導のためのカウンセリングなどの方法を充実すること」を挙げ、本年度は、ゆとりと充実を基調とする小・中学校の学習指導要領が公示された。学校カウンセラー養成定期研修で得られたものが時代の要請に応え、新しい教育課程に十分反映されるよう、先生方の精進を期待してやまない。

おわりに、これまでご支援、ご協力いただいた関係者各位に深く感謝するとともに、各界のご指導とご助言をお願いする次第である。